審 査 の 結 果 の 要 旨

氏　　名　　石橋　弘之

21 世紀のカンボジアでは、内戦と政変からの復興と再生の時代から、内戦後の開発の時代へと移行し、市場経済化が進められてきた。政治経済の中心であるカンボジア中央部から国境の山岳森林地域へと開発が展開し、人と自然の関係が急変するなか、現在の変化を、双方の地域の関係の歴史から理解する議論が展開されている。しかし、国家の担い手とされてきた多数派民族クメールが主に住む中央部の研究と、国家の周縁において少数民族が住む山岳森林地域の研究は別々に進められてきた傾向がある。

本研究は、カンボジア西方のタイと国境を接するカルダモン山脈を対象に、山岳森林地域に暮らしてきた人々が、近代から現代の歴史をいかに生きてきたのかを、中央部を対象とした研究も参照して明らかにするものである。具体的な研究課題として次の 3 つが設定された。(1) 19 世紀から 20 世紀中頃にかけての交易品カルダモンの産地形成過程について、植民地史観と本質主義に基づいて解釈してきた先行研究を再考し、同時代に中央部の政治体制が交易を基盤とする国家から植民地体制へ移行した背景をふまえて明らかにする。(2) 20 世紀後半にポル・ポト政権下の強制移住先から人々が帰村した事実が生活再建を基礎づけ社会再生の方向付けがなされた中央部農村の状況とは異なり、内戦の主戦場となったカルダモン山脈において、森の中に逃れた人々が帰村困難となって各地を移動した状況をふまえて、避難生活から生活再建までの過程を明らかにする。(3) 21 世紀初頭の市場経済化、国家制度の浸透、自然環境の急変への人々の対応を、内戦後の新たな現象として捉えるだけでなく、それまでの歴史をふまえて明らかにする。

上記の課題にアプローチするため、聞き取り調査で得た口述資料、現地調査で得た民族誌的資料、文献調査で得た文書資料を用いた。これらの資料を、人々が語る多様な歴史を解釈する方法と、同時代の同地域に出所をもつ資料を照合して歴史事実を把握する方法を用いて検討した。調査地はバッタンバン州（TT 区）、ポーサット州（OS 区）、コッコン州（RC 区）と近隣の行政区の集落に位置し、2007 年から 2013 年に断続的に現地を訪問して約 12 か月間滞在した。

以上の 3 課題を 3 部（9 章）に構成し詳細な検討がなされている。その内容をまとめ次のような結論が得られた。

カルダモン産地の開拓の文脈をふまえると、開拓者が移住前にいた地域だけでなく、移住後に産地の現場で開拓をいかに進めたのかを知ることも重要である。近代の歴史的文脈をふまえると、開拓の背景には交易を基盤とした国家を担った為政者の商業的関心もあった。しかし、猟師が開

拓先の森で動物や霊と交渉して人の命や暮らしと引き換えにカルダモンを得てきた伝承は、商業的側面に還元できない交易の観念を示唆していた。内戦下の森に逃げた人々は、既知の人だけでなく未知の人と出会い、反政府勢力下にありながらも「紛争からの中立」という立場を共有する集団を形成し、同郷者と異郷者が共住する集落を形成した。内戦後はカルダモンの利用に地域差が生じながらも、開発に対応する過程で人々は地域間で連携するネットワークを形成した。そこではカルダモンを利用してきた歴史的背景をもつ人々が、先住民の権利を主張する現代的文脈のなかで交流した。これは、地域間に共通する資源に注目することで、内戦後の変化に対応する人の移動と交流を、内戦前からの歴史をふまえて理解する重要性を示している。一方で、地雷原、開発、保護地域の規制は、人々の生活圏を狭め移動を制約した。それによって、内戦前後の移動の内実が変化した側面もある。そして、市場経済が質的に変化するなかで、自然資源の共同利用は難しくなっていた。しかし、交易品の産地に住む人々は、人間以外の存在も持主であると考えて交易をしてきた歴史を現在でも語っている。これは、内戦後の市場経済が他者への意識のもち方を弱めていると認識される状況を、交易品の産地の歴史から再考する上で示唆を与える。

以上のように、本研究はカンボジアの山岳森林地域の森をめぐる移動と交流の歴史を中央平野部との関係を踏まえて詳述したものであり、学術上応用上の貢献を認めることができる。よって、審査委員一同は本論文が博士（農学）の学位論文として価値あるものと認めた。